

國學院大學學術情報リポジトリ

島根県・美保神社境内遺跡出土の玉作資料

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 加藤, 里美, 柳浦, 俊一 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00002008

島根県・美保神社境内遺跡出土の玉作資料

加藤里美・柳浦俊一

要旨

美保神社境内遺跡出土の碧玉と瑪瑙は玉作資料であり、供伴する土器類の性質や遺構が未確認であること、周辺の遺跡の様相等を加味すると古墳時代中期のものと考えられる。これまでに、出雲地域にて確認されている玉作遺跡及び関連遺跡は106遺跡を数えるが、いずれの遺跡とも様相を異にしており、祭祀行為にともなう玉生産のありようを提示できる貴重な資料といえる。

キーワード

碧玉、玉作、勾玉、接合資料、未製品

1. はじめに

島根県松江市美保関町に鎮座する美保神社は、境内から、弥生時代末期から古墳時代中期頃、奈良時代の遺物が出土しており、断続的に人の営みが確認されている。また、『出雲国風土記』島根郡、美保郷に美保の地名の由来、また、美保の浜の記載では西に神社、北に民家があり、マグロをとり、美保の崎は岸壁が切り立つ険しい地形であることや、『延喜式』神明帳には内社「美保社」として記されるなど、古くから社として認識され周囲には人が生活していたことがうかがえる。さらに、その後も現代にまで長期間にわたって精神的な活動を行う場所として機能してきたと考えられ、島根半島東端の重要な地点であることがわかる（関和彦2004）。

美保神社境内遺跡からは、碧玉剥片類が497点出土しており、これまでの調査により玉作遺跡であることが判明した⁽¹⁾。遺跡が位置する島根半島東端域では初めての玉作遺跡であるが、これまで注目されることはなかった。また、この遺跡の玉作関連資料は大きな特徴があることも明らかとなった。そこで、今回は美保神社境内遺跡を玉作遺跡として提示すると同時にその意味について考え、問題点と今後の課題を整理したい。

2. 美保神社境内遺跡と周辺遺跡（第1図）

美保神社周辺には、縄文時代の遺跡は確認されて

おらず、五本松公園入口付近で石錘が発見されているのみであるが、同町内の海岸沿いには、洞窟遺跡が認められる。また、旧四谷小学校にある四谷遺跡からは、弥生時代中期・後期の甕、高坏が出土しており、美保神社境内遺跡からは弥生時代末期の甕や壺、高坏が出土している。古墳時代の遺跡としては、39古墳群107基の古墳が確認されている。このうち、神社周辺に4古墳群27基が確認されており、町内において最も古墳が密集している地域である。ほとんどが墳丘の規模が10m前後の円墳で、時期不詳のものを除いて古墳時代中頃から終わりにかけて造営されたと考えられている（松本岩雄1986）。

3. 美保神社境内遺跡について

①概要

平成8年、旧美保関町教育委員会によりに美保神社収蔵庫設置に伴う調査が実施された。1辺10mのグリッドが3箇所設定され、第1・2層は攪乱ならびに比較的新しい時期の層位、第3層から5層の間に約10,000点の土器片（須恵器・土師器含）、碧玉類が出土した。円礫と粘性の高い土が混在している層位であることと、伏流水の通り道一带にあたっていることから、遺構は検出されていない（第2・3図・錦織慶樹1996）。

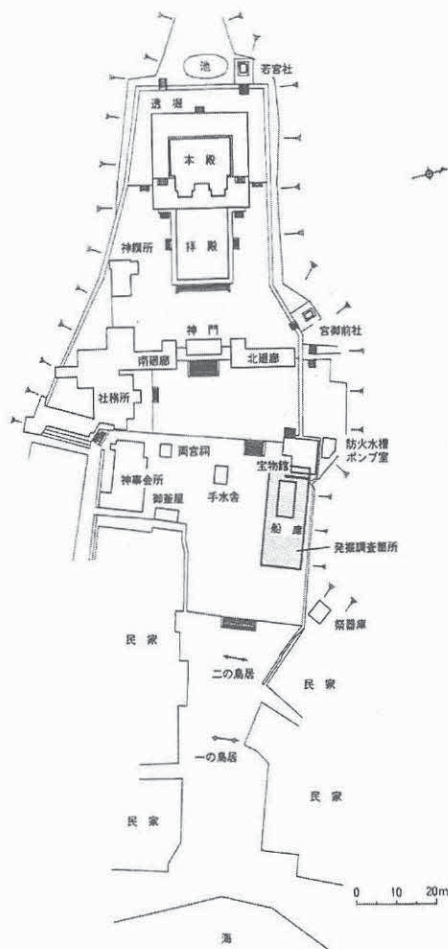
②土器他

弥生時代後期、古墳時代前期、古墳時代中期の土

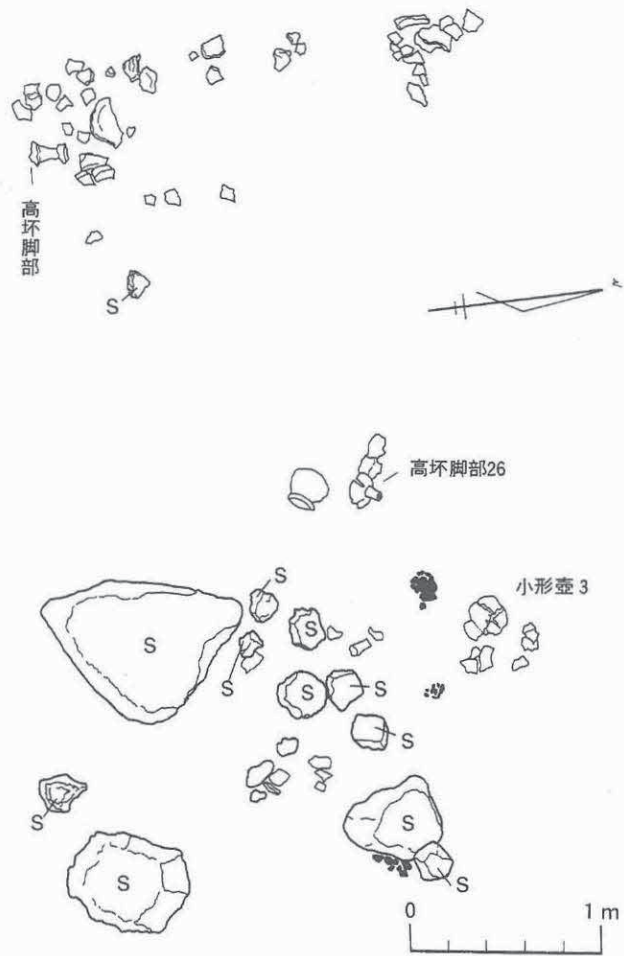


- 1 美保神社境内遺跡 2 石錘出土地 3 四谷遺跡 4 客人社古墳 5 宝寿寺古墳
 6 山嶺古墳 7 弥陀ガ谷古墳 8 海崎古墳 9 天神社裏山古墳群 10 銭山古墳
 11 中峯山横穴 12 前屋古墳 13 四谷古墳 14 ばか坂古墳群 15 荒神山古墳

第1図 美保神社周辺遺跡分布図



第2図 美保神社境内図 (錦織1996より)



第3図 A-2区遺物出土状況 (Sは石、黒塗は碧玉・錦織1996より)

器が混在しており、中には因幡や石見の影響を受けていると考えられるものも存在する。また6世紀末～7世紀初頭の初期の須恵器、8世紀前半、中頃の須恵器が出土している（図版1・錦織1996）。

また、軽石が十数点出土しており、このうち穿孔がある1点は浮きと考えられる（第4図-1）。

③碧玉・黒曜石・瑪瑙

美保神社境内遺跡からは487点の碧玉、3点のメノウ、8点の黒曜石が出土している。このうち、最も出土量の多い碧玉は、土器片と同様の場所に礫などに混ざって散布しているものの、比較的まとまって出土したことが図から推し量ることができる（第3図）。今回の報告は、主に碧玉について再検討したもので、以下に詳細を記す。

4. 玉作関連資料

(1) 石材

本遺跡から出土した玉作関連資料は、ほとんどが碧玉製の剥片類（約1.7kg）で、ほかにメノウ製剥片が3点（約8g）、黒曜石が10点（約19g）出土しているにすぎない。また、他の遺跡で一般的に出土する水晶、滑石（緑色泥岩）は出土していない。碧玉は、淡緑色の部分を有すものがあるものの、全体的に濃緑色を呈し、外観からは松江市玉湯町所在の花仙山産出とみなされ、黒曜石は隠岐島産出のものと考えられる⁽²⁾（柴崎晶子2011）。

(2) 碧玉製品

勾玉未成品（第4図-2・3、図版2-1・2）

器種が判別できる未成品としては、整形段階の勾玉未成品2点が出土している。これらは全面に調整剥離が加えられ、腹部中央またはそのやや上位で欠損している。調整剥離は腹部にも施されており、すでに勾玉形に整形された、いわゆるC字形勾玉未成品である。第4図-2は欠損部分にも剥離が加えられ、欠損後も製作が試みられているが、完成するこ



図版1 出土土器一括（一部）

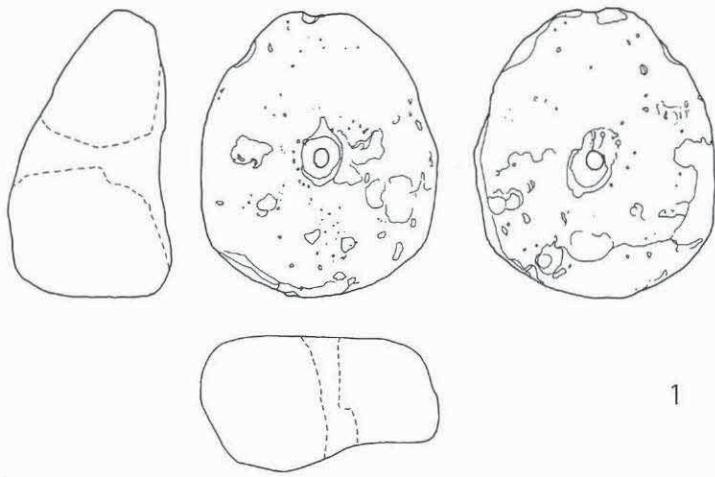
となく放棄されている。2は現存長2.5cm・腹部幅2.5cm・厚さ1.5～2cm、第4図-3は現存長3.5cm・腹部幅3cm・厚さ1.5～1.8cmを測り、完形ならば長さ4～5cmの大型品と考えられる。色調はともに濃緑色を呈した良質の碧玉が使用されている。二次加工のある剥片（第4図-4・5 図版1-3～6）

第4図-4は長さ4cm・幅2cmの棒状の剥片、5は長さ6cm・幅3cmの棒状の剥片で、ともに縁辺に二次的な剥離が施されている。表面は淡緑色、剥離面は濃緑色を呈す。5は調整剥離段階で欠損している。

図版1-5は剥片2個の接合資料で、そのうち1個に剥離が加えられている。長さ6.4cm・幅1.5cmの棒状の剥片で、表面は淡緑色だが剥離面は濃緑色である。剥離が他の剥片の接合面に当たり、この剥片を作出後に二次的に剥離が行われたことがわかる。

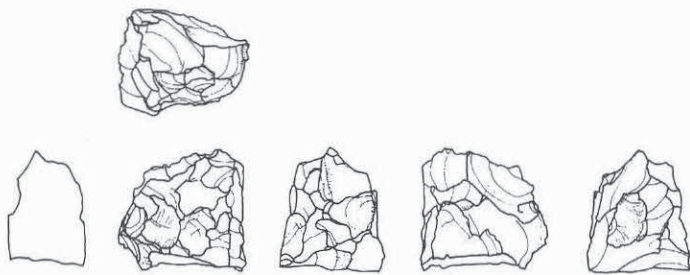
以上の3点は調整剥離が加えられるものの、目的器種が特定できない。全体の形状は管玉未成品にもみえるが、他に明確な管玉を指向したものがないこと、これらからは出雲玉作に特徴的な径の太い管玉未成品が作出できないことから、管玉未成品と認定しがたい。

図版1-6は長さ4cm・幅2cm・厚さ2cmの剥片で、側縁と端部に剥片が接合した。全体に濃緑色で、良質な碧玉である。表面に二次的な剥離が観察できる。接合した剥片の外表面は礫面が残る。全体

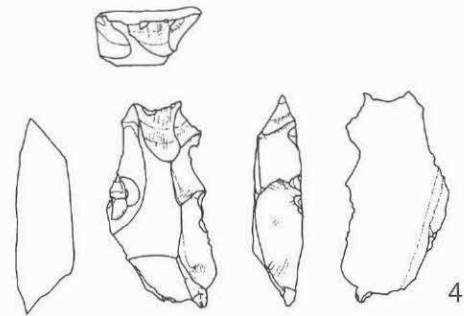


1

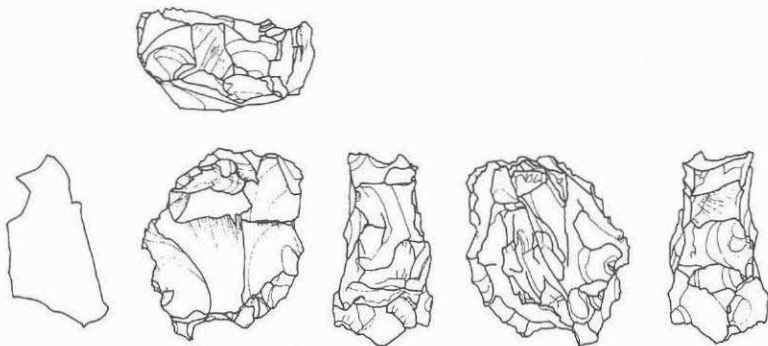
0 5cm



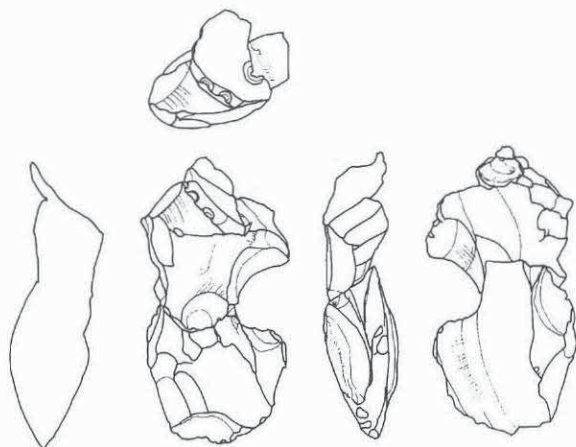
2



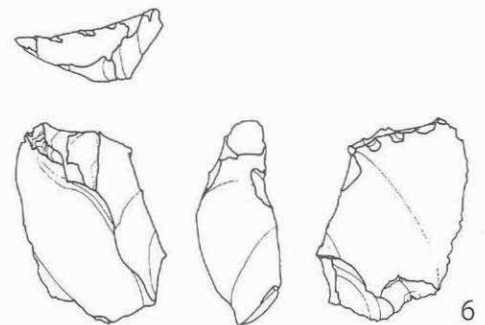
4



3



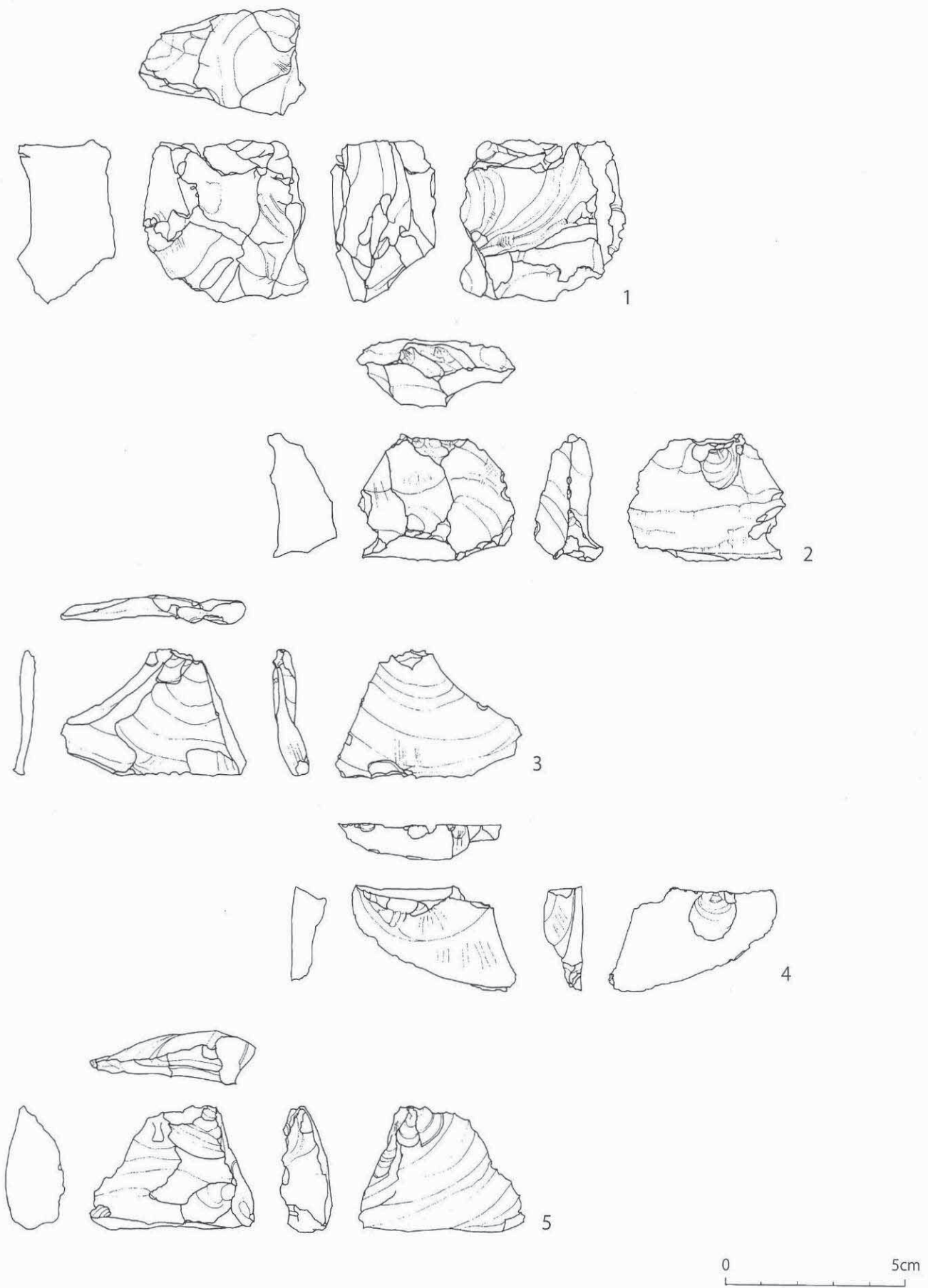
5



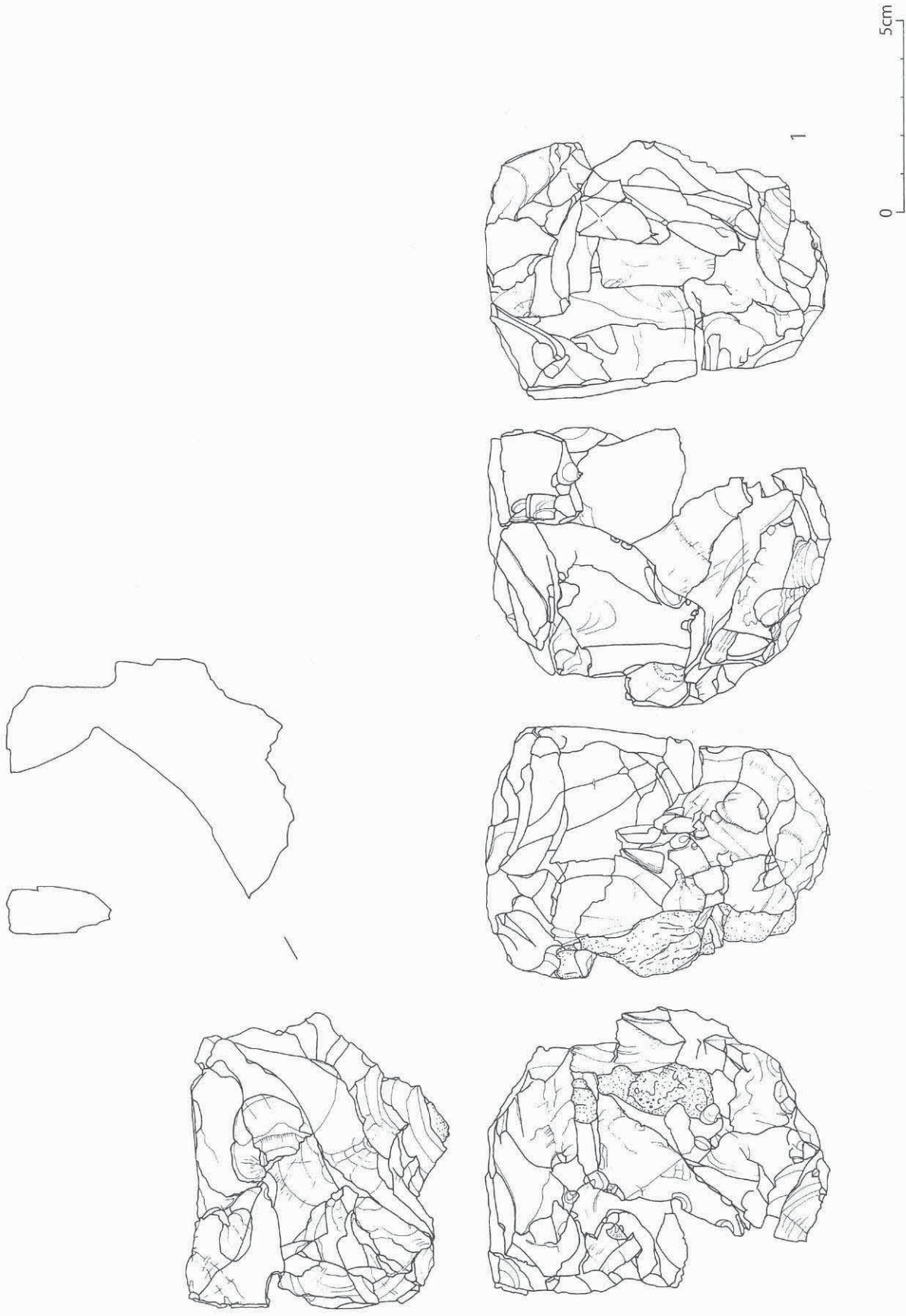
6

0 5cm

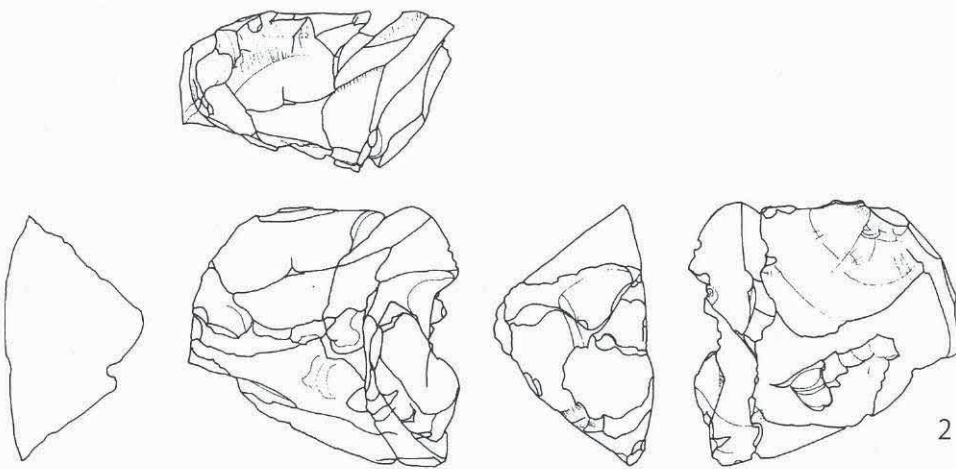
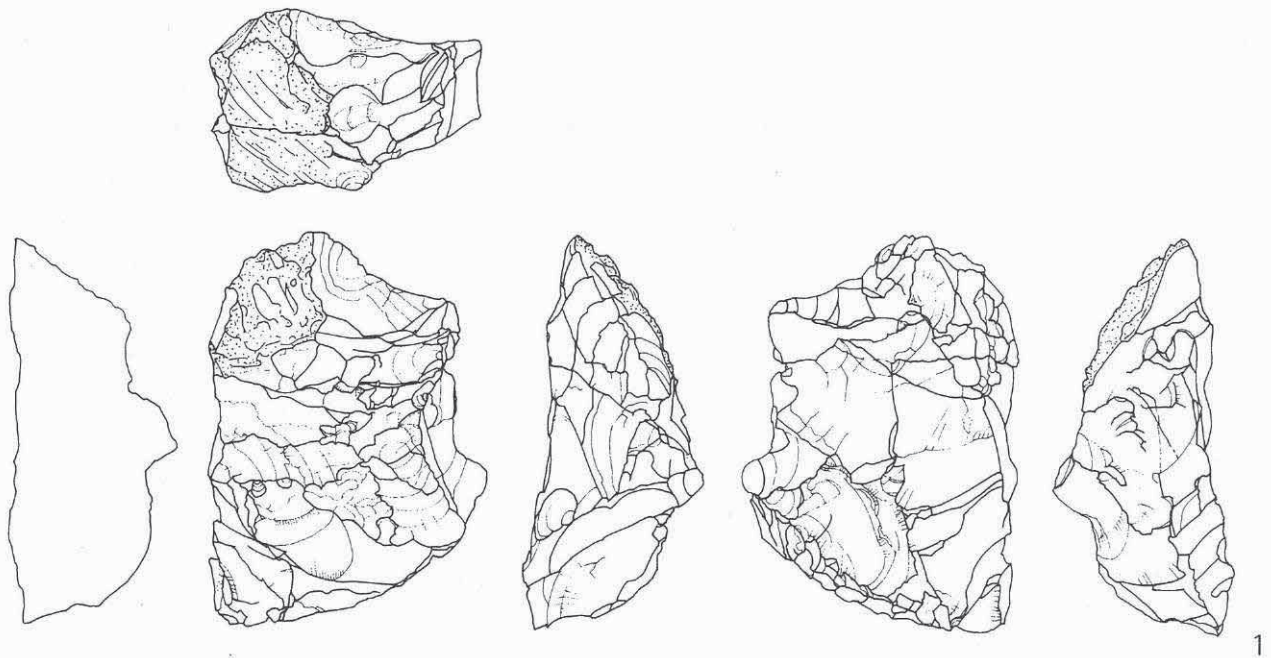
第4図 軽石製品・玉作関係遺物(1)



第5図 玉作関係遺物(2)



第6図 玉作関係遺物(3)



0 5cm

第7図 玉作関係遺物(4)

の形状はD字勾玉未成品に似るが、この形状の未成品から成品が製作されたかどうかは、本遺跡資料中からはうかがえない。

素材剥片（第4図-6・第5図-1～3・図版2-8～14）

勾玉や管玉が製作可能な大きさの剥片を素材剥片として抽出した。第5図-1は長さ4.1cm・幅3.5cm・厚さ1.7cmなどがこれに相当するが、この中に管玉を指向するものは認められなかった。多くは一面に濃緑色の部分がみられるものの一部が淡緑色を呈し、全体が質の良好なものは少ない。図版2-8は、素材剥片分割の際に破損した細片の接合資料である。母材（第6図-1・第7図1～2 図版2-7・3-1～3）

第6図1は剥片17片からなる接合資料で、全長9cm・幅8cm・厚さ7cmの塊状を呈す。全体の表面は白色がかった淡緑色で、全面に質の悪い部分を除去しようとした剥離痕が認められる。また、接合資料に残る外皮をもとに母材の大きさを推定復元すると、8cm×9cm×10cmのような立方体を想定することができる。また、上面中央には大きな穴が開いているが、これは剥片剥離の際の打撃によると考えられる。

この接合資料は第7図-1・2の大きく2個の素材剥片と複数の剥片で構成され、剥片第7図-1→同第7図-2の順に分割されたと考えられる。第7図-2Bの上端に剥片分割後に剥離された2個の小剥片が接合していることから、剥片第7図-1・2の大型剥片は素材剥片として成品を指向していたと思われる。これらの素材剥片の大きさは、勾玉を製作することが可能であるが、石質が粗悪であることから製作を断念し、廃棄したものと考えられる。

この接合資料は中心部分が欠落している。欠落部分はおおよそ7×4.5×3.5cmの立方体で、素材剥片第7図-1・2の大きさを参考にする素材剥片がもう一個存在した可能性が高い。とすれば、この接合資料で復元された母材からは少なくとも3個の素材剥片が作出されたことになる。この内面をみると、各面とも濃緑色な部分が認められ、欠落した中心部分は3つの素材のうち最も良質であったと推測される。中心部分の範囲から推定すると、この部分は大型の勾玉が十分に製作可能な大きさである。出土資

料にはここに接合するものは確認できなかったため、この接合資料の欠落部分が成品に加工された蓋然性は高いと思われる。なお、第7図-1・2の素材剥片以外の剥片は、この欠落した素材剥片から剥離されたと考えられる。

図版2-7は3個の剥片からなる接合資料で、各面に礫面が残る。長さ4.4cm・幅2.6cm・厚さ2.3cmと小型で、不要な剥片の可能性もあるが、母材の原型がうかがえる。

剥片（第5図-3～5 図版4-1～14・5-1）

剥片は出土数をもっとも多く、424点を数える。剥片は法量分布に示す通り（表1）、0.4～6.5cmほどのものまでであるが、1.5～1.9cmまでのものをピークとして多く出土しており、母材面が残存しているものが全体の22%を占めている。また、これらは大きく長さ3cm以上の大型剥片とそれ未満の小型剥片に分けられる。大型の剥片（図版4-6～14）は一部が淡緑色を呈すなど、多くは質の悪い部分である。第6図-1などを参考にすると、母材表面を調整する段階で産出したものと考えられる。図版4-1～6は厚さの薄い剥片の接合資料で、1は母材または素材剥片の形状が円筒形だったと推定される。図版4-4・5の上面には打撃痕が観察できる。これらはいずれも表面に淡緑色の部分が認められることから、母材加工時に質の悪い部分を除去する工程で産出されたものと思われる。図版4-2～5はこの段階の様相を表していると考えられる。図版4-

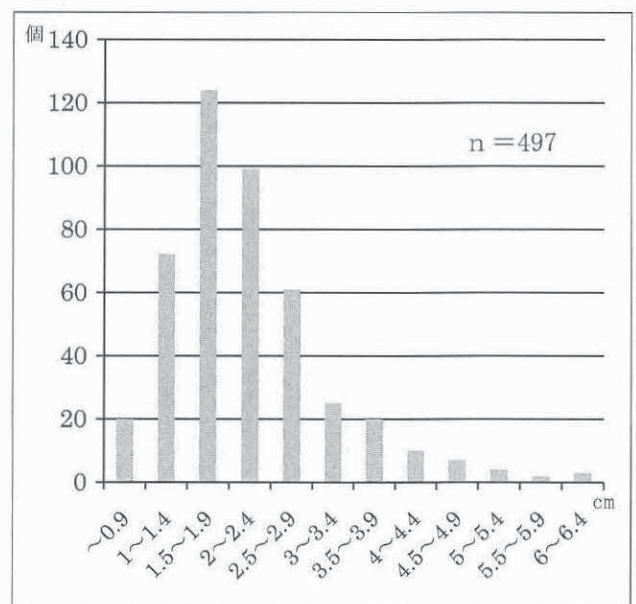


表1 剥片法量分布

1は濃緑色の部分が多いのが特徴で、整形段階で産出された剥片からなる接合資料の可能性はある。

3cm以下の小型の剥片、図版5-1は、濃緑色で良質なものと、淡緑色の質の悪いものがある。前者は勾玉未成品の剥離面と同様な大きさで、素材剥片から調整剥離する段階で産出された可能性がある。後者は質の悪い部分を除去しようとしたものと思われるが、どの段階で産出したものか不明である。

(3) メノウ剥片 (図版5-2)

やや赤味がかかった小型の剥片で、長さ1.9cm、幅2.4cm、厚さ0.5cm、2.2cm、幅1.5cm、厚さ0.6cm、長さ3.3cm、幅1.1cm、厚さ0.7cmを測る。いずれも調整剥離段階で産出した剥片と思われる。

(4) 黒曜石剥片 (図版5-3)

小型の剥片10点で、最大のものが、長さ3.0cm、幅2.0cm、厚さ1.0cm、最小のものが1.1cm、幅1.2cm、厚さ0.6cm、である。最大の資料には、端部につぶれ様・刃こぼれ様の微細剥離が観察できる。これらは、加工対象ではなく、碧玉を加工する際に必要な工具の一つであった可能性がある。しかし、微細剥離痕が僅かにしか認められてない点や資料が少量であることなどから、碧玉を直接的に加工するのではなく工具調整の道具である可能性も捨てきれない⁽³⁾。

5. 美保神社境内遺跡出土の玉作関連遺物の特徴

当遺跡で使用された石材は99%以上が碧玉である。メノウはわずか3点確認されただけで、水晶、滑石など他の石材はまったく利用されていない。出雲の玉作遺跡では、一つの石材に極端に偏った生産が行われた遺跡はほとんどなく、量の多寡はあるものの複数の石材を使用するのが一般的である。本遺跡の特徴として、碧玉材に限定した玉生産が行われたことがまず上げられる。

本遺跡で製作された主な器種は勾玉と思われる。第4図-2・3で整形段階の未成品を示したが、これ以外に器種が判別できる未成品は出土していない。素材剥片はいずれも幅広の剥片で、これらから製作される器種はやはり勾玉の可能性が高い。第4図-4 (図版2-3)は棒状の剥片に二次的な剥離が施されており、これらが管玉未成品の可能性も皆無ではないが、管玉未成品とするには躊躇される。判別可能な器種が勾玉に限られること、素材剥片が勾玉

製作を指向した形状であること、明瞭な管玉未成品が出土していない、などを考慮すると、本遺跡では碧玉製勾玉に限定した玉生産が行われたと推測される。

本遺跡での剥片類の出土量を考えると、ここで玉製作が行われたのは間違いないと思われる。ただし、玉作工房とされる住居跡状の遺構は検出されず、玉作遺跡で必ずといってよいほど出土する玉用砥石(筋砥石・結晶片岩製砥石)や鉄器などの工具は出土していない。工具類は玉製作後に持ち出されたことや未調査の場所にあることが推測されるが、他の遺跡でよく出土する玉用砥石が全く残存しない状態も特異である。この状況は、この地での玉生産が臨時的であったことを示すように思われる。このような臨時的な玉生産の様相は、本遺跡で整形段階の未成品が少ないこと、他の遺跡と比べて玉作遺跡としては相対的に未成品や剥片の出土量が少ないことからもうかがえる。

6. 結語

碧玉類と共伴した土器類には、日常生活に用いたものとまつりの道具と考えられる土器類とが混在している。こうした出土状況と類似する遺跡として大東高校グラウンド遺跡(蓮岡1988法暉)の資料があげられるが、古墳時代中期の他の祭祀遺跡の様相とは異なっていることも確かである。一方で玉作遺跡においては、古墳時代中期に至ると竪穴住居とよく似た構造の工房を構えるか、加工段を設けて製作の場所を確保することが通常となっており、この点についても当該遺跡と資料は合致しない。以上から、本遺跡では特定石材(碧玉)を使用し、特定器種(勾玉)を製作した、臨時的な玉作が行われた様子が想定される。従来知られた玉作遺跡は、継続的・複数石材使用・複数器種生産が一般的様相なので、本遺跡の状況は従来の玉作遺跡と大きく違うと考えてよい。

島根県東部のいわゆる出雲地方は、古代玉作が盛んに行われた地域として有名である。現在知られる玉作遺跡は島根県内で106遺跡を数え、その大半は宍道湖南岸・中海南岸に集中している(島根県古代文化センター2004)。特に、碧玉・メノウ原産地である花仙山の位置する宍道湖南東岸には約50遺跡

が密集している。美保神社境内遺跡は、花仙山から直線距離で約30km離れており、出雲玉作分布域の範囲外に位置する遺跡である。古墳時代中期は花仙山を中心とした碧玉の玉作が盛んとなる時期でもあり、島根半島東端の美保関から碧玉と隠岐産の黒曜石が出土すること、因幡や石見地方の土器が混在することは、活発な海上交通の要衝を想定させる。

上述した玉作の内容の特殊性を考慮すると、美保神社境内遺跡の玉作は、107カ所目の玉作遺跡となる。さらに、これらの玉作関連資料が、まつりに使用した土器類と共存していること、遺跡が海浜に立地すること、明瞭な生活遺構が検出されていないこと等から、他の玉作遺跡とは違った、祭祀行為との関連性をうかがわせる。

以上、美保神社境内遺跡における祭祀遺跡のまつりの道具に玉作資料があることを提示した。しかしながら、祭祀に用いられた土器と製作した玉製品が同一の祭りに使われたのか、まつりの場において玉作を行うことについての意味や祭りの目的など、検討すべき課題が多く残った。また、紙面と作業時間の関係からへ碧玉に関する考察も十分に行えなかった。併せて、今後の課題としたい。

註

- (1) 日本文化研究所のプロジェクト「神道と日本文化の国学的発信の拠点形成」他（平成15年～19年）以来、日本における基層信仰についての研究の一環として美保神社所蔵の資料に触れる契機となった。さらに、このたびの本学オープンリサーチセンター事業において、出雲におけるまつりに関して研究を進める過程で、島根県教育委員会と共同調査を実施した。美保神社ならびに横山直材宮司の全面的なご協力のもと、改めて、美保神社境内遺跡の遺物を検討する機会を得た。
- (2) 肉眼観察により、碧玉は花仙山産出、黒曜石は隠岐島産出と考えられたが、その結果は柴崎晶子氏の分析結果と一致した。
- (3) 黒曜石片については、寺村光晴氏より、緩衝材としてのご指摘を受けているが、さらに検討を要することから、今後の課題としたい。

引用・参考文献

- 加藤里美 2008 「<資料紹介・翻刻>美保神社出土の土馬と『美保神社所有 出土品に関スル調書綴』『日本文化研究所紀要』100輯 國學院大學日本文化研究所
- 柴崎晶子 2011 「美保神社所蔵の玉作関係遺物と黒曜石の蛍光X線分析について」『國學院大學伝統文化リサーチセンター紀要』第3号 國學院大學研究開発推進機構伝統文化リサーチセンター
- 島根県古代文化センター 2004 『古代出雲における玉作の研究Ⅰ』-中国地方の玉作関連遺跡集成- 島根県古代文化センター調査研究報告書22
- 関 和彦 2004 『「出雲国風土記」註論嶋根郡・巻末条』 島根県古代文化センター調査研究報告書25
- 寺村光晴 1966 『古代玉作の研究』國學院大學考古学研究報告第3冊
- 錦織慶樹 1996 『美保神社境内遺跡』重要有形民俗文化財収蔵庫（改築）予定地内発掘調査報告書 美保関町教育委員会
- 蓮岡法暉 1988 「付編Ⅰ 大東高校グラウンド遺跡」『角田遺跡・又下遺跡 付 大東高校グラウンド遺跡他資料』大東町教育委員会
- 深田 浩 2004 「島根県の玉作関連遺跡」『古代出雲における玉作の研究Ⅰ』-中国地方の玉作関連遺跡集成- 島根県古代文化センター調査研究報告書22
- 松本岩雄 1986 『美保関町誌 上巻』
- 柳浦俊一 1997 『福富Ⅰ遺跡 屋形1号墳』一般国道9号（松江道路西地区）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 2 島根県教区委員会
- 米田克彦 2005 「出雲における古墳時代玉生産の展開と独自性」『玉文化』第2号

土器写真撮影：加藤里美 山添奈苗（平成19年日本文化研究所プロジェクトにて）

玉作関連資料撮影：江戸邦之 加藤渉 平野哲也

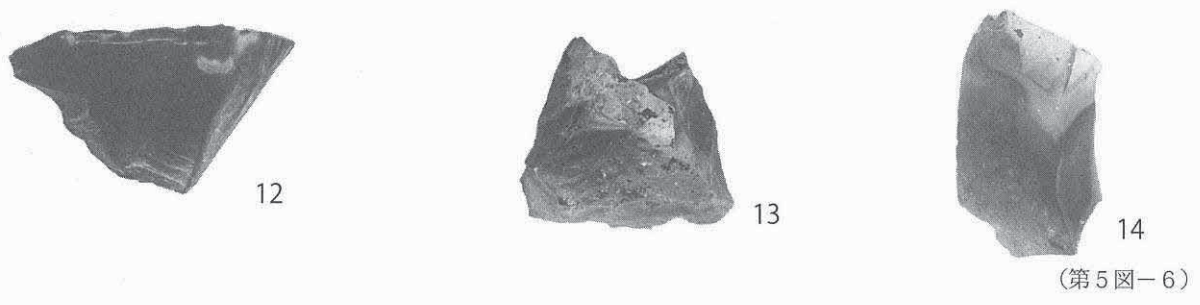
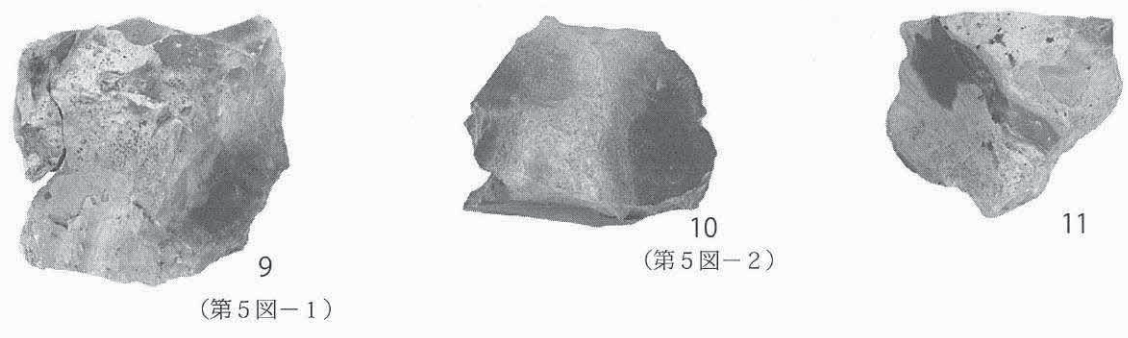
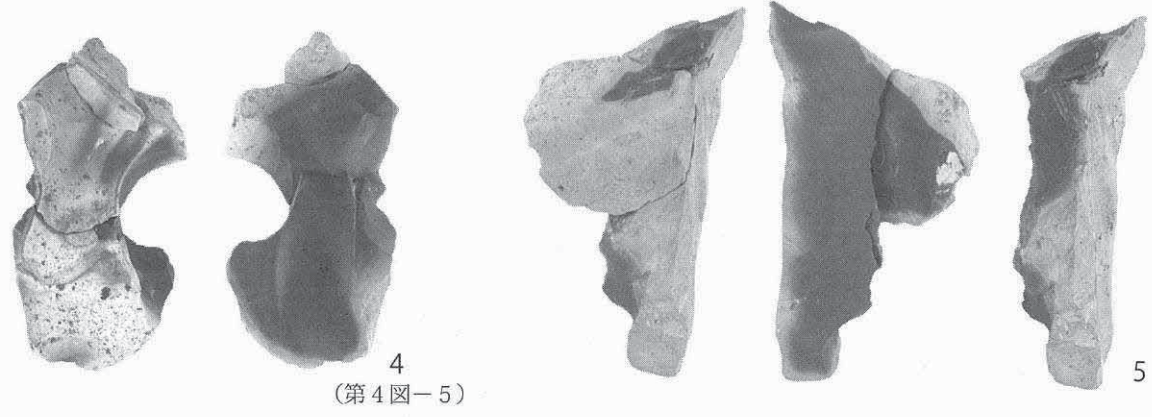
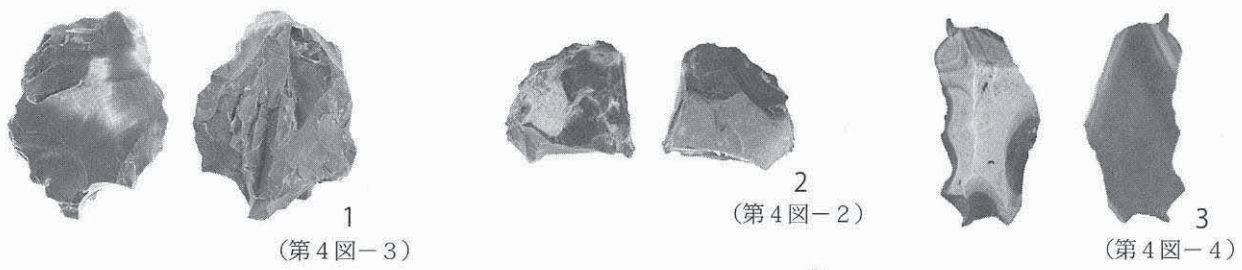
謝辞

末筆となりましたが本稿執筆にあたり、多くの方々にご教示、ご協力を賜りました。記して御礼申し上げます。

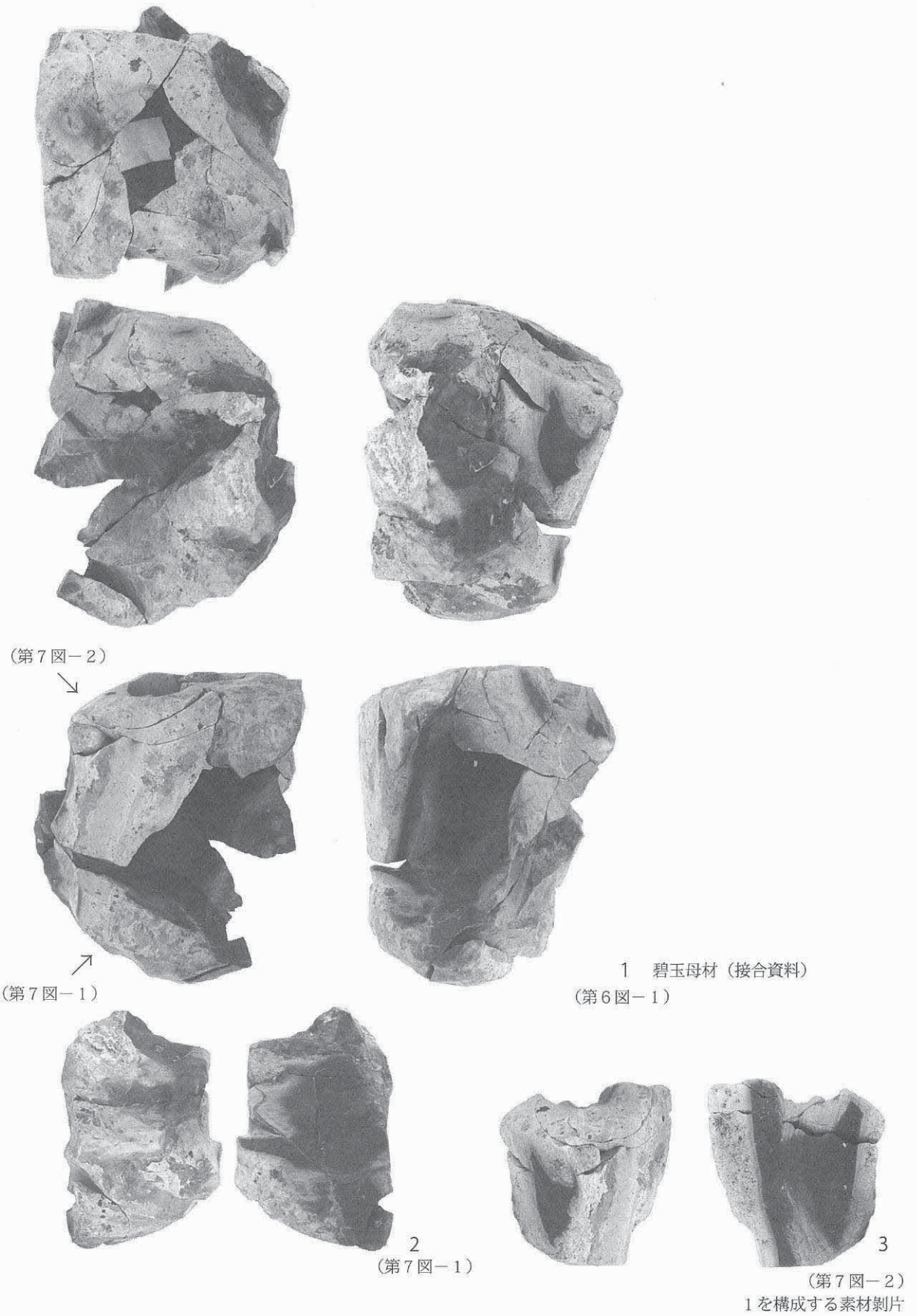
美保神社 島根県教育委員会

横山直材・横山宏充・横山直正

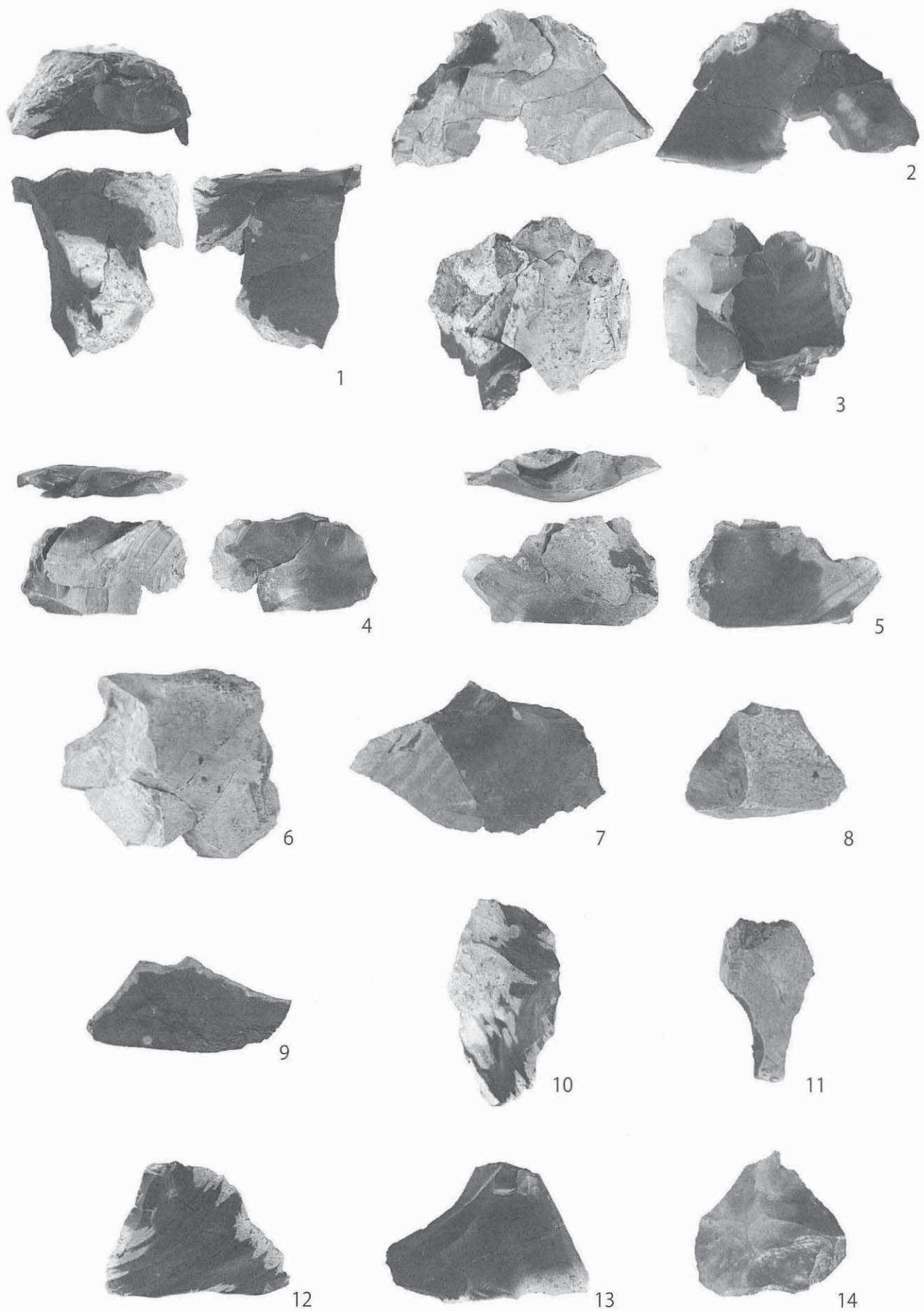
伊藤博司・五十嵐睦・稲田美里・内川隆志・江戸邦之・大日向一郎・加藤元康・久保田健太郎・齋藤しおり・柴崎晶子・新原佑典・杉山章子・杉山林継・寺村光晴・波形早季子・中島将太・中村耕作・成田美葵子・西尾克己・錦田剛志・錦織慶樹・平野哲也・松本岩雄・山添奈苗



図版2

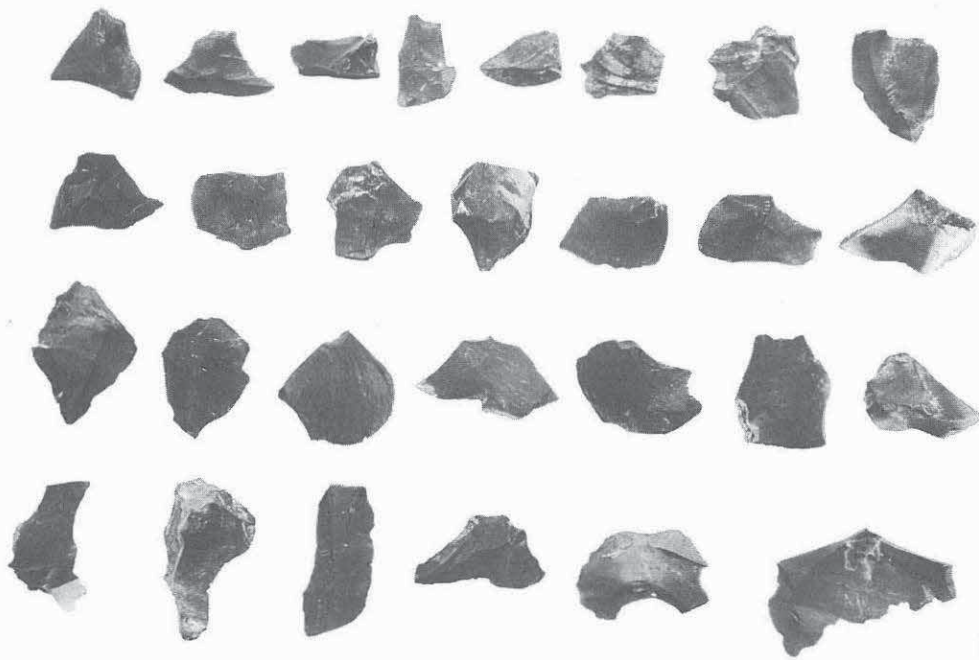


図版3

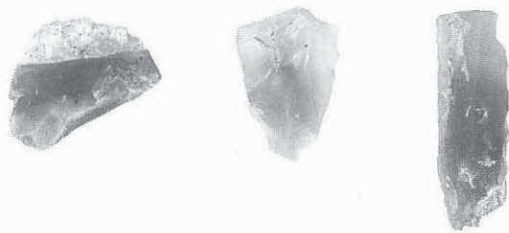


大型剥片（1～6は接合資料）

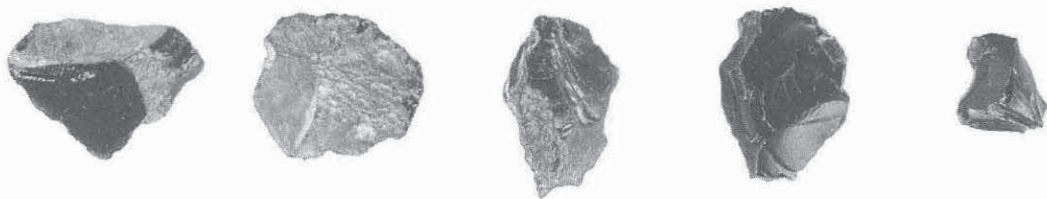
図版4



1 小型剥片



2 メノウ剥片



3 黒曜石

図版5